

IV - 6

四ッ谷（仙台）用水から見た仙台北城下町形成に関する研究

東北大学工学部 正員 ○小林眞勝
東北大学工学部 正員 稲村 肇

1. 本研究の背景と目的

仙台市地下鉄勾当台公園駅構内で汲み出される日量 250^トの地下水の有効利用と言うことで、昭和62年「四ッ谷用水」の一部を復元する工事が着手された。しかし、この「四ッ谷用水」の全容を知る市民は少ない。本研究は「四ッ谷用水」が今日の仙台市発展とどの様に関わり合いを持っていたかを探ることを目的とする。

2. 四ッ谷用水の創設

慶長6年（1601）、伊達政宗により仙台北城の構築が画策され、城下町は地盤と地下水に恵まれた所から開発された。この新城下の人口の概数は、家臣8,000戸、町民2,000戸、寺方250戸、その他を併せて総戸数約10,850戸、人口約52,000人であった。開発の進行につれて、雑用水や防火用水を十分にまかなうことが出来なくなった。この不足を補う為に行ったのが四ッ谷用水の工事である。城下の地形は図-1で見るとように西北に丘陵と段丘崖下の広瀬川があり、東南には緩く発達した数段の段丘が海岸まで続く。中に大小幾多の湖沼や谷地が点在していた。

この用水は元和年間に家臣川村孫兵衛重吉¹⁾が手掛け、二代目孫兵衛元吉²⁾に引き継がれ四代藩主綱村在世（1660-1719）の頃に開通した。

水源は広瀬川で、取入口（標高65.35m）の郷六から梅田川の合流点（標高40.09m）までの本流は、約7,260m、落差は25.26mある。取水口から城下に入る大崎八幡までは導水路であり、トンネルが4ヶ所約2,084mもある一大土木事業であった。

支流、枝線が城下町を毛細血管の様に流れ、その流水の推定総延長は41~44km余にもおよぶ。

3. 用水と城下町形成

図-2は城下町の区域拡大と四ッ谷用水拡張の様子を示したものである。開府当時の城下区域は、東は広瀬川に接する土樋から、北鍛冶町等を結ぶ線内であった。この頃は、城下の水はけの悪い箇所の排水路工事が行われ、これにより地下水位も低下した。同時期に下町東側の段丘の下手に四ッ谷用水の一部

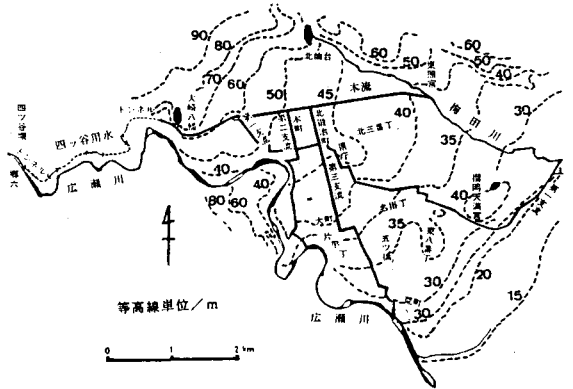


図-1 城下町の等高線と四ッ谷用水幹線図

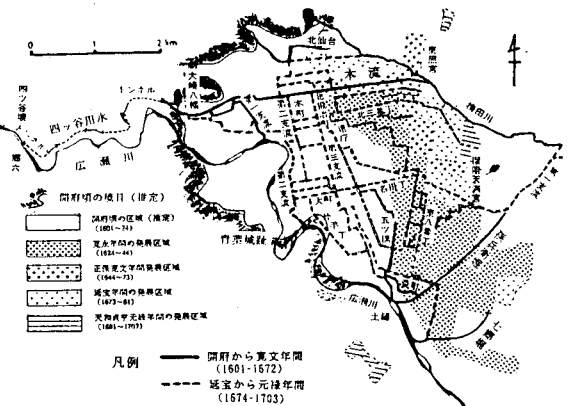


図-2 城下町拡大と四ッ谷用水拡張図

をなす孫兵衛堀・七郷堀が造られた。この頃の本流は、八幡町西の湧水や沢水等を導水路にまとめ、宮町を流れ梅田川に放水された。寛文4年頃までに郷六から取水し導水された様である。この本流から三本の支流が分流していた。第一支流（延長6,600m）は、覚性院町⇒県庁⇒榴岡通⇒原町を流れ末端は灌漑用水として放流された。第二支流（延長2,300m）は木町⇒本柳町を流れ広瀬川に放水された。第二支流から分水が北三番町、大町に流れていた。第三支流（延長3,650m）は北鍛冶町⇒国分町⇒清水小路（五つ橋方面）を流れ、広瀬川に放水されていた。第三支線からは枝線が多数分水されていた。

城下は開府された慶長6年から貞享年間の約85年

間に三回拡張された。第一次の拡張は元和・寛永年間に北東と東方面で用水の第一次工事完成後と符号している。旧城下町の約三分の一ほどの面積が増加した。第二次の拡張は正保～寛文年間で主として城下の北東部に若干の町を割り出した。特に二代藩主忠宗の承応3年(1654)東照宮の造営に伴って、宮町が新たに割り出され、北五、六番丁も拡張された。鉄砲町が置かれたのもこの頃である。第三次の拡張は、延宝年間(1673-81)の四代藩主綱村の頃で、北部では北六番丁以北、東部では小田原方面に侍屋敷が次第に配置されて、城下町はほぼ完成を見た。

4. 水のネットワークの完成

内陸水運を開発することは藩政時代の最重要課題であった。伊達藩の外海は波が荒く当時の船舶では航行が困難であり、河川と湖沼を結ぶ運河を堀り内航の充実を図った。(図-3)今も残る木曳堀(後に貞山堀に包括)は城下町を造成する時に掘られたものである。その後、領内各部の貢米と各地の木材等の運漕と塩釜から石巻を経て江戸までの物流ネットワーク構築の為に、塩釜湾牛生から大代を経て蒲生に至る御舟入堀が開かれ蒲生御蔵が置かれた。ここから城下へは七北田川を利用し、鶴巻御蔵を置いた。ここからさらに、御舟曳堀(人が舟を曳く)を掘り、苦竹御蔵を置き、ここから陸揚げして牛車により原町御米蔵に運んだ。御舟曳堀には梅田川と七郷堀から水が供給されていた。梅田川には四ッ谷用水の本流及び第一支流が流れ込んでおり、七郷堀と合わせて広瀬川の水が御舟曳堀の水量確保に貢献していたと思われる。第三支流の放水口は広瀬川にあり、その下流付近には舟溜まり(舟丁)が置かれ、物流集積所として賑わい、閑上湊は貞山堀と広瀬川の交差湊として要所だった。

5. 四ッ谷用水の効用

仙台の段丘地は、表土から地下数mの厚さの段丘れき層があり井戸は容易に掘ることが出来た。しかし、自然の地下水は、夏季は豊かであるが冬季は乏しくなる傾向があった。用水により地下水に涵養を持たせ年中安定させることが出来、さらに多くの湧水を生み出した。国分町では用水がすぐ脇にありながら湧水を底樋を通して給水し飲料していた。この様に豊かな往時の水環境は、仙台藩の奨励であった屋敷林の育成にも役立ち、「杜の都」形成の大きな

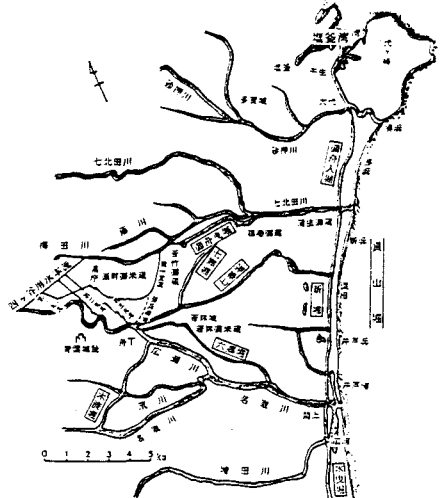


図-3 城下町と水のネットワーク

要因となった。日常生活においても炊事・洗濯のほか、夏期には道路への散水、冬期には雪捨場に利用された。城下には水車がありその動力源としても欠かせないものであった。流末は運河の調節水や灌漑用水として使われ、四ッ谷用水の水は一滴たりとて無駄なく利用されていた。

6. おわりに

藩政時代期から流れ続けて来た用水も明治32年からの下水道工事により昭和10年頃までには一部を残し、暗渠化された。最近、各地で郷土史から新しい発見を模索することが盛んである。著者は後世に残すべき土木遺産であると考え、この用水が日の目を見ることを望んでいた。そんな矢先に仙台市地下鉄工事により出た地下水を利用して、四ッ谷用水の一部を復活させたことは大いに評価出来る。今後も、地区整備の際に四ッ谷用水を復活させ潤いのある町づくりが行なわれることを希望するものである。最後に、本稿をまとめるにあたりご助言頂きました仙台水の文化史研究会長・佐藤昭典氏並びに会員各位に深く感謝申し上げます。

参考資料/佐藤昭典「もう一つの広瀬川」(1989)、波多野純「仙台城下町における四ッ谷堰用水について」(1979)、荘司貴喜「四ッ谷用水」、奥津春生「大仙台圏の地盤・地下水」(1975)、和泉匡剛「貞山堀の流れ」、仙台市史統編編纂委員会「仙台の歴史」(1970)

注1)河村孫兵衛重吉(1574-1648)は毛利輝元に仕えたあと伊達政宗の家臣となる。普請,金山奉行

注2)河村孫兵衛元吉(1623-1692)先代の長女の婿、養父の遺志を継ぎ土木水利事業に携わる。